

はじめに

私たちの飯田市は、「環境文化都市」を宣言し、常に人と自然の関わりを見つめ直しながら、日々の生活から産業活動までのすべての営みが自然と調和するまちづくりを目指して環境政策を展開しています。この環境政策をけん引してきたのが、平成8年に定めた飯田市環境基本条例と、21'いいだ環境プランです。これらはいずれも、人類共通の課題である今日の環境問題に対して地域全体で取り組み、持続可能なまちづくりを進めていくことを基本理念としています。

今日の環境問題は、ごみ問題、地球温暖化の深刻化、生物多様性の低下など、日常生活や通常の事業活動による環境への負荷の増大に起因するものが多くなっています。そして、その原因や影響は複雑で多岐に渡り、地球全体に及ぶ空間的な広がり、過去の世代から将来世代にまで及ぶ時間的な広がりを持っています。また、私たち自身が被害者であると同時に加害者でもあるという側面も持っています。これらは、私たちの経済社会活動が自然環境に対して与える負荷が、徐々に限界に達しつつあることが原因であると考えられます。

平成8年に定められた21'いいだ環境プランは、次のような環境像や施策目標などを示し、施策を展開し始めました。これらは多少の変更はあるものの、今日に至るまで飯田市の環境行政の基盤となっています。

- ◆ **望ましい環境像** : 「空あかるく風にほやかなるまち、いいだ」
- ◆ **政策展開の理念** : 循環・共生・参加・個性
- ◆ **政策展開の方針** : 「きづかいのまちづくり」
- ◆ **施策目標（柱）** : 「廃棄物の削減と適正処理」「地球環境問題への対応」「緑の保全と創出」「良好な景観の形成」「安全なまちづくり」「意識づくり」

飯田市は、平成14年と平成20年の2度に渡り、21'いいだ環境プランの改訂を行ってきました。改訂の過程において、市民、事業者、行政が協働しながら、ごみ処理費用負担制度の導入、容器包装などリサイクルの推進、太陽光発電設備の普及、学友林の整備、環境マネジメントシステムの展開などの取り組みを開始し、次第に深化させて今日に至っています。

一方、平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、故郷の自然、地域社会、人々の暮らしと命を一瞬にして破壊し、私たちに自然の猛威と人知の未熟さを痛感させました。私たちの生活は、普段は意識していなくても、母なる自然の営みの中にあり、多様な生命のつながりの中で営まれています。私たちは、人と自然との関わりをこれまでとは違う重さで受け止め、日々の生活から産業活動までのすべての営みが自然と調和することの大切さを、改めて考える必要があります。今こそ、現在の経済社会システムや生活様式を見直していく「環境優先の時代」が到来しているといえます。

環境問題の解決への道のりは、先は長く厳しいものがあります。しかし、「環境」をすべての基本に置いて、持続可能な社会の構築を目指さなければなりません。そのためには、国、地方自治体はもとより、市民、事業者などの全ての主体が、公平に役割を分担し、絆を強め、共に「飯田らしい環境を創る」という段階に向かうべきです。

飯田市は、リニア時代にふさわしい「小さな世界都市・多機能高付加価値都市圏」を目指し、新たな歩みを始めました。21'いいだ環境プランの第3次改訂にあたって、環境先進都市として評価されている現在の飯田市の取り組みを更に発展させ、長期的な都市像である「環境文化都市」を目指したまちづくりを進めます。皆さん、共に手を携えて、「空あかるく風にほやかなるまち、いいだ」を、次の世代に引き継いでいきましょう。

第3次改訂の狙い

21'いいだ環境プラン第3次改訂は、第2次改訂版の対象期間（平成20年3月～24年3月）の満了に伴って行いました。

第2次改訂版の対象期間中には、環境政策を取り巻く状況の変化がありましたので、これらを今回の改訂に反映させるとともに、今回の改訂時期が第5次飯田市基本構想後期基本計画の策定期間と重ったことを受けて、次の3つの視点で改訂を行いました。

飯田市が平成20年度に「環境モデル都市¹」に選定されたこと、平成22年度の環境首都コンテストにおいて「明日の環境首都賞²」を受賞したこと、東日本大震災等の影響により人々の意識が変化したことを、改訂内容に反映させました。

多様な主体による協働の重要性が高まっている状況を踏まえ、飯田市の環境政策の課題を地域・市民・事業者・行政が共有し、更なる協働を進めることができるプランとしました。

このプランの上位計画である第5次飯田市基本構想後期基本計画にうたわれるとおり、「環境」をすべての基本に置いて施策の目標を達成するため、このプランの進行管理は、第5次飯田市基本構想後期基本計画及び飯田市環境マネジメントシステム（飯田市役所 ISO 14001・南信州いいむす21³など）による進行管理と連動させて行います。

環境文化都市宣言

平成19年3月

私たち飯田市民は、地球環境問題が人類共通の課題であることに着目し、人と自然の関わりを見つめ直して、日々の生活から産業活動まですべての営みが自然と調和するまちづくりに、先駆的に取り組んできました。

自然環境や生活環境などを取り巻く状況が厳しさの度を増している今日、「持続可能性」と「循環」を基本にして自分たちのライフスタイルから社会のありように至るまでを改めて見直し、「環境に配慮」する日常の活動を「環境を優先」する段階へと発展させながら、新たな価値観や文化の創造へと高めていく必要があります。

私たちは、かけがえのない地球にある生態系の中で自然と共生する地球市民の一員としての原点に立ち返り、先人から受け継いだ美しい自然環境と多様で豊かな文化を活かしながら、市民、事業者、行政など多様な主体の積極的な参加と行動とによって人も自然も輝く個性ある飯田市を築くことを誓い、ここに「環境文化都市」を宣言します。

¹ 環境モデル都市：低炭素社会の目指す姿を具体的なイメージで分かりやすく示すために、高い目標を掲げてチャレンジする環境先進都市のことで、現在、飯田市を含む全国13の都市が国から選ばれている。選ばれた都市は、目標達成のために実行する内容を「アクションプラン（行動計画）」として定めている。

² 明日の環境首都賞：平成22年度に行われた「日本の環境首都コンテスト」において、飯田市は総合2位となったが、総合1位で『日本の環境首都』の称号を得た水俣市に匹敵するという高評価を得て、当市に贈られた賞。このコンテストは、環境首都コンテスト全国ネットワーク(NPO/NGOによるネットワーク)が、平成13年度から平成22年度まで開催したもので、応募自治体は環境政策が総合評価されて順位付けされ、上位の都市は表彰される。飯田市は過去10回に全て応募し、平成22年度に最高の2位を獲得。

³ 南信州いいむす21：詳細は第2章、102ページ下部のコラムを参照。

21'いいだ環境プランのこれまでの歩み

1 21'いいだ環境プラン（対象期間：平成8年12月～平成14年7月）

「21'いいだ環境プラン」は、「環境文化都市」を目指す都市像として掲げた第4次飯田市基本構想における、環境政策分野の総合的行政計画として策定しました。

◆ 主な取組み

- (1) 3R（リデュース・リユース・リサイクル）の推進のため、ごみ処理費用負担制度を導入し、分別の徹底を図りました。今日、この制度は定着しています。
- (2) 住宅用太陽光発電設備や太陽熱温水器の設置補助制度を導入しました。今日、太陽光発電は、世帯数の5%程度にまで普及しています。
- (3) 市の公用車に、ハイブリッド車の導入を始めました。
- (4) 緑化樹木選定指針に基づき、街路樹や公共施設等の植樹をするようにしました。
- (5) 環境教育と里山保全の場として、各学校で学友林の整備を行いました。
- (6) 水質汚濁防止や騒音対策などを進めるために、定期的な観測測定を行うようにしました。
- (7) 市民が積極的に身近な環境保全に関われるように、環境調査員（通称、環境チェッカー）制度を導入しました。
- (8) 市民同士が環境について学び合えるように、環境アドバイザー制度を設けました。
- (9) 市役所がISO 14001を取得するとともに、「地域ぐるみ環境ISO研究会」に加入し、日常的な環境負荷の低減に取り組むようになりました。
- (10) 市内の企業が開発した環境配慮型製品を「ぐりいいんだ」として認定し、公表する制度を設けました。

2 第1次改訂版（対象期間：平成14年8月～平成20年2月）

基本的な部分を継承しつつ、市民の主体的な参加を得て、内容を見直しました。

◆ 主な取組み

- (1) 新焼却場建設に伴い、ごみ減量や分別を強化しました。廃棄物の減量が進むようになってきました。
- (2) 木質バイオマス利用への取組みを始め、公共施設への燃焼機器の設置や住宅向け補助制度を導入しました。
- (3) 環境省の「環境と経済の好循環のまちづくり事業（通称：まほろば事業）」の採択を受け、太陽光市民共同発電プロジェクトが動きだすなど、自然エネルギー利用や省エネルギーへの取組みが大きく前進しました。
- (4) 飯田市景観条例及び飯田市緑の育成条例が施行され、市街地の緑化や景観形成を、計画的かつ市民参加で実施していく仕組みが動き出しました。
- (5) 地域自治組織が発足し、環境保全や防災等での地域の主体的な活動が大きくなりました。
- (6) 環境自治体会議いいだ会議の開催や子ども環境会議など、環境のまちづくりを学び合う場が設けられ、多くの市民が参加し、自分たちの取組みを再確認しました。
- (7) NPO/NGOが主催する日本の環境首都コンテストにおいて、度々表彰されるようになり、環境への取組みが全国に知られるようになりました。
- (8) 市役所ISO 14001を、自己適合宣言に切り替えました。
- (9) 地域ぐるみ環境ISO研究会が、地域簡易版のEMS「南信州いいむす21」を構築し、地域内の事業所への普及を始めました。今日、61事業所が取得しています。

3 第2次改訂版（対象期間：平成20年3月～平成24年3月）

飯田市第5次基本構想基本計画の策定と「環境文化都市宣言」を受けて改訂を行いました。市民参加による内容の見直しを行い、施策の柱の一つである「各分野を支える基盤的施策」を「環境と経済が好循環したまちづくり」に変更し、また、リーディング事業を設けました。また、期間中に内閣府から「環境モデル都市」に選定され、自然エネルギー利用の普及が強化されるとともに、公民協働で事業を行っていくという方向が定まりました。

しかし、基本計画の事務事業と一致しないリーディング事業があったり、環境モデル都市行動計画とプランとの不整合があったりして、プランの進行管理が難しい事態も生じました。

◆ 主な取組み

- (1) 南信州地域において、スーパーのレジ袋削減の取組みを行い、レジ袋有料化が実現しました。今では、マイバッグ持参は当たり前になってきています。
- (2) 新最終処分場が整備され、ごみの減量化（リデュース）への取組みが強化されました。
- (3) 広域連合が整備した「リサイクルステーション」を利用して、リユースへの取組みを強化し始めました。
- (4) 市民の意見を背景に、有価物を適正に保管するための環境保全条例の改正が行われました。
- (5) ごみのポイ捨てや不法投棄に対する市民の目が厳しくなり、地域での啓発防止活動が盛んになるとともに、行政の取組み強化が求められるようになってきました。
- (7) 地域で、アレチウリの駆除や河川敷の環境美化などの自主的な活動が盛んになってきました。
- (8) 南アルプス高山植物等保全対策連絡会と連携して、鹿などの増加により脅かされる高山植物の種の保全に取り組みはじめました。
- (9) 東日本大震災に伴う原発事故の影響で、放射能汚染への対応が必要となってきました。
- (10) りんご並木にエコモデル住宅を建設し、環境を意識した市民サロンの開催など活発に利用されています。年間1万人近い人が訪れています。
- (11) 太陽光発電の普及を促進する手段の一つとして、初期投資不要の「おひさま0円システム」が始まりました。
- (12) 中部電力との協働による「メガソーラーいいだ」が整備され、運転が始まりました。
- (13) 移動手段の低炭素化を促す「自転車市民共同利用システム」の運用が始まりました。
- (14) バイオマスタウン構想を策定し、木質バイオマス普及について、通年需要の開拓、原料と製品の流通システムの整備という課題への取組みが始まりました。
- (15) 地元企業が共同開発した LED 防犯灯が、市内だけでなく市外でも採用され普及し始めています。また、その他の環境製品の開発でも共同の取組みが始まっています。

伊那谷の自然と文化～「下伊那の歌」に寄せて～

飯田下伊那に生まれ育った人の多くは、「下伊那の歌」を知っています。歌を口ずさむとき、私たちの心のうちに、様々な自然と人の営みが去来します。

下伊那の歌 その一

作詞：鎌倉 太郎 作曲：松本 民之助

赤石は 山脈（やまなみ）青く 天竜は川波白く 母の国 母の国 伊那は故郷
ああ 兄弟（はらから）よ 希望を胸に とともに伸びよう 手を組んで

春草の 落葉の秋よ 春台の 松の緑よ 永遠（とこしえ）に 永遠に 光る灯
ああ 先人の 歩みを継いで とともに学ぼう 手を組んで

段丘に 梨の花咲き 桑畑に歌声漏れる 豊かなる 豊かなる この伊那谷に
ああ 平和への 願いをこめて とともに進もう 手を組んで

赤石は 山脈（やまなみ）青く 天竜は川波白く...

伊那谷は、日本の中央部に位置する大きな谷で、東の赤石山脈、西の木曾山脈に連なる山塊に挟まれ、その谷の中央を天龍川が北から南へと流れ下っています。

天龍川の両岸の河岸段丘と扇状地は日本一といわれる雄大さがあり、3千メートルから3百メートルに至る急峻な標高差の中に、大小の谷と山間盆地が多く形成されています。この基本的な地形と景観は、中央構造線を形成した大規模な地殻変動と連動した造山運動によって形成されたもので、世界的に見ても珍しい地形です。

気候は、東海型内陸気候で基本的には温暖ですが、作物の南限北限が重なり合い、動植物の種類も豊富です。野山に降り注いだ雨や雪は、花崗岩や石灰岩など、それぞれの地域に特有の土の中で浄化され、美味しい水となり、段丘や扇状地の裾から湧出しています。

母の国 母の国 伊那は故郷...

伊那谷の自然の豊かさや特徴は数え上げればきりがありません。それを知識としてきちんと学ぶとともに、五感で自然を感じることも大切です。

風越山の息吹のように感じられる風の匂やかさや、東海の海の青さが滲んでいるかのような空の明るさ、路傍の草花の青さや深山で目にする可憐な草花、生き生きとした田畑の作物、伸ばした手に触れる木々の幹や枝、眼前で舞うトンボや蝶の姿、蛙の合唱や蝉しぐれ、秋虫の声、やがて瀬となり淵となり天龍川に注ぐ水の流れなど、日々の暮らしの中、五感で自然を感じているのではないのでしょうか。

人も獣も鳥も虫も魚も草も木も皆、この伊那谷で生きています。私たちの周りにあり、私たちの営みを黙々と支えている自然と環境は、まさに母なる故郷です。



春草の 落葉の秋よ 春台の 松の緑よ...

故郷と感じられる自然は、人それぞれだと思います。菱田春草は、幼い頃に遊んだ裏山の秋が忘れがたかったのでしょうか。太宰春台は、屋敷の庭の松の雄々しさを糧に学問に励んだのでしょうか。私たちが日々にふれあう自然は断片的なものであり、好ましく感じる対象も様々、動植物に寄せる思いも深淺があります。



私たちが心の中で結ぶ故郷の自然は、そのどれもが混じり重なり合っています。いわば、伊那谷の地形と景観が織りなす環境が、私たちにとって身近な自然です。私たちは、そこから様々な恵みを得ています。

段丘に 梨の花咲き 桑畑に歌声漏れる...

ほんの数十年前まで、私たちの周りには、のどかで豊かな田園風景があふれていました。ところが、今ではこのような風景は、その気にならないと見られなくなっているようです。私たちが実際に見て接する自然や環境は、私たちのイメージするものと異なってきています。

それは、ここ数十年の私たちの社会経済活動が、自然の営みを余り考慮することなく、自然に手を加え変えてきたからです。例えば、市田柿の自然乾燥が難しくなっていることや、いわゆるゲリラ豪雨の発生などの現象は、地球温暖化の影響ではないかといわれ、また、アレチウリなど外来種の繁殖や農林業における鳥獣害の増加なども問題になってきています。



このような変化を元に戻すことは難しいかも知れませんが、私たちは、人と自然との関わり方を見直し、自然の営みと人の営みが調和するような暮らしを考え、できることから実践していくことを求められているのではないのでしょうか。

先人の 歩みを継いで 共に進もう 手を組んで...

人間の精神は、その暮らしが営まれる自然環境や風土の中で育まれるといわれています。険しく独立した地形の伊那谷で暮らす人々は、自立の精神とともに閉鎖的で慎重な性向を持たざるを得ないでしょう。そして、複雑で平地の少ない土地を相手にする耕作は、否応なく共同作業が求められたに違いありません。この共同作業が、結いの精神を育み、今も受け継がれています。



かつて人物の往来が徒歩や馬や舟で行われていた頃、険しい山道や急流を越えての移動は大変だったことでしょうか。山を越えてもたらされた文物は、私たちの先祖にとって、珍しく貴重な情報であったに違いありません。その貴重な文物を大切にし、そこから学ぶことが、この地に暮らす人々にとってどんなに楽しいことであったか。こうして先取の気風が養われたのではないのでしょうか。今でも数多くの伝統芸能が保存継承され、住民同士が学び合う公民館活動が盛んです。

伊那谷を訪れる人達は、異口同音に「自然が豊かで美しい」と言います。そして、人々のゆかしさにひかれるようです。私たちは共に手を携え、故郷が育ててくれた「結いの精神」と「先取、自立の気風」に誇りを持ち、この伊那谷の自然、景観、文化を大切にし、大きな負債を残さず、よき未来を次代につなげていきたいものです。

